

正史
 實傳
 いふは文庫
 十

~13
 4307
 10



ハ13
4307
10

2
250
10



早稲田大學教育學部



16098

正史ばんこいは文庫十篇叙おんえのき
 實傳ぜり古講師くこうしが札つゑを敲たたきて次あに結むすひ明あす
 晩ばんの後ご海うみふと虫むし穴あなとら海うみで暮ます
 切きりも心こころをしる方かた便べん小せう禰ね友とも若わかき
 流ながが春はるの終はるり亦また後ご田でんの分ぶん前ぜんと所しよ
 けと逃にげるも腹はらおあいと余あまさりりぬがる

この史の誰も志願する者良蔵御自作の
 加へしこと後より其形してと。何伎の
 への條を如く。虚事と述免る。言五
 練砲の妙ふの似るものもふく刀で急ぐ
 川の飛く。備看官の是自利あると。院
 多相候んと出く。先年。徳川。

かのちり 涼ハまき六段是ハ十編らん
 集りやうれ 雲もの上より吐き出
 者が純平 辻構新の一口のうも方
 こそ味いあうん 新を

為水者水誌る



春野の顔に打ち且乃天絆るど
 投つてその厭敷上の目には入る
 惚き雜多をみるお七面外
 ろる小坊主みる唯七刀を
 あらあけてお七は病
 御せー

清水逸角

梅屋
 春野

牧野
 春野



春野の帥真
 茶乃坊主かり
 村入の夜
 小服を
 格て近むと
 唯七がえん
 不便小女の
 汝幼年の
 天晴の心底るほど
 立強の怪我する
 とく一刀を奪ひえ
 一石の裡へ押入にかの悪童子の厭で搦ま

建林唯七

逸角の二國の

英勇後士

二個を

捕まに滅ひ

菅屋

判之丞

為

命を

104-102





下男七助

本編
 小精
 鏡
 略



牛尾田水主

宇和嶋の藩中
 沼澤傳五左門

梅屋

この口繪の
 分解
 不口



あはれ

あはれ

梅香
月夜

あはれ
あはれ

正史いろは文庫卷之廿八

江戸 為永春水著

第五十五回

牛尾田を水の七脚ををひある一言小ちもて夏の光言
 かく知る教と揚うねてさう儂向つ飛さしは娘くあつて
 吐息つきて我まぐらうさう儂が居るが肌あて巨木が
 色香ふんと奈の身の一大事ふ及ぶべにとさあが武士の
 舞あらざりし由金く你の赤む由あまときうともあひびく



眼とまゐるの法外のとのふところ今又面目ありき解く癖ハ
さうくまい許して呉りやま七肋とのあふ送方の飛ぶさうたつ
と許す不平外て焼く潤ふ稍煮く自由あげぬを法入一が
七 可くお勉かごりまんかを度いと取さる教ふもさぬ下節わが
中あげこことかえあげ下さつて意外の癖とささめゆなく
及つか巻のか癖いふ方友のか令さだ載こより飛ぬい
とさふ教つごうちさう一すばきく狂作の心をさふみ
ましく後うの下の謎の子といひのまぬまへへくつんまば

七穂あとい我が門扉不削ま休一病方まこる旅の小
事乃伴とてもつんへさまば不俊不ふひ我親人が登妻の
裡へさまけいし種も久抱ありし病の早晩本復る
如何なる者ぞと尋ねし生由い作縁されどもお親さ小
世とさうて教さる死身とのあふよりその候かお止おたて
まよ廢つらこふありしその小量ハ徐めてささた十一才と
やうまを生と安しく寝ねどもを振返のまめやうさ長の
旅路不尾程うちがし身形ハ結くつんまば下線の

其の亂といふその時よりして思ひしと思ふと忘れぬ今宵の
仕方のやうにして家来一休の狂言の考もて奈何あるか
かくまを不猫一休身ありつるも仔細具不物然らば家来を
の及びん能い力とありて得さるべしつゞん借事と聞ひしけれ
浪史四言不きつしまじが物とさざめて小徳と扱め 十五の
まううして親止ぬさぬの思ふと被り是まをさなと伸し
思報ドもせぬうち不家ガ身の人と被りくとまうしあけ
あばばらへふか心まひと掛んうとあふぢふふ今日までも深く

つこく不房らま生れゆくまを作らるうら今の陽まふ
かさねぬ実家等が又とまうまへ修まのまを和を由家の
浪史四言不きつしまじが物とさざめて小徳と扱め 十五の
まううして親止ぬさぬの思ふと被り是まをさなと伸し
思報ドもせぬうち不家ガ身の人と被りくとまうしあけ
あばばらへふか心まひと掛んうとあふぢふふ今日までも深く

浪史四言不きつしまじが物とさざめて小徳と扱め 十五の

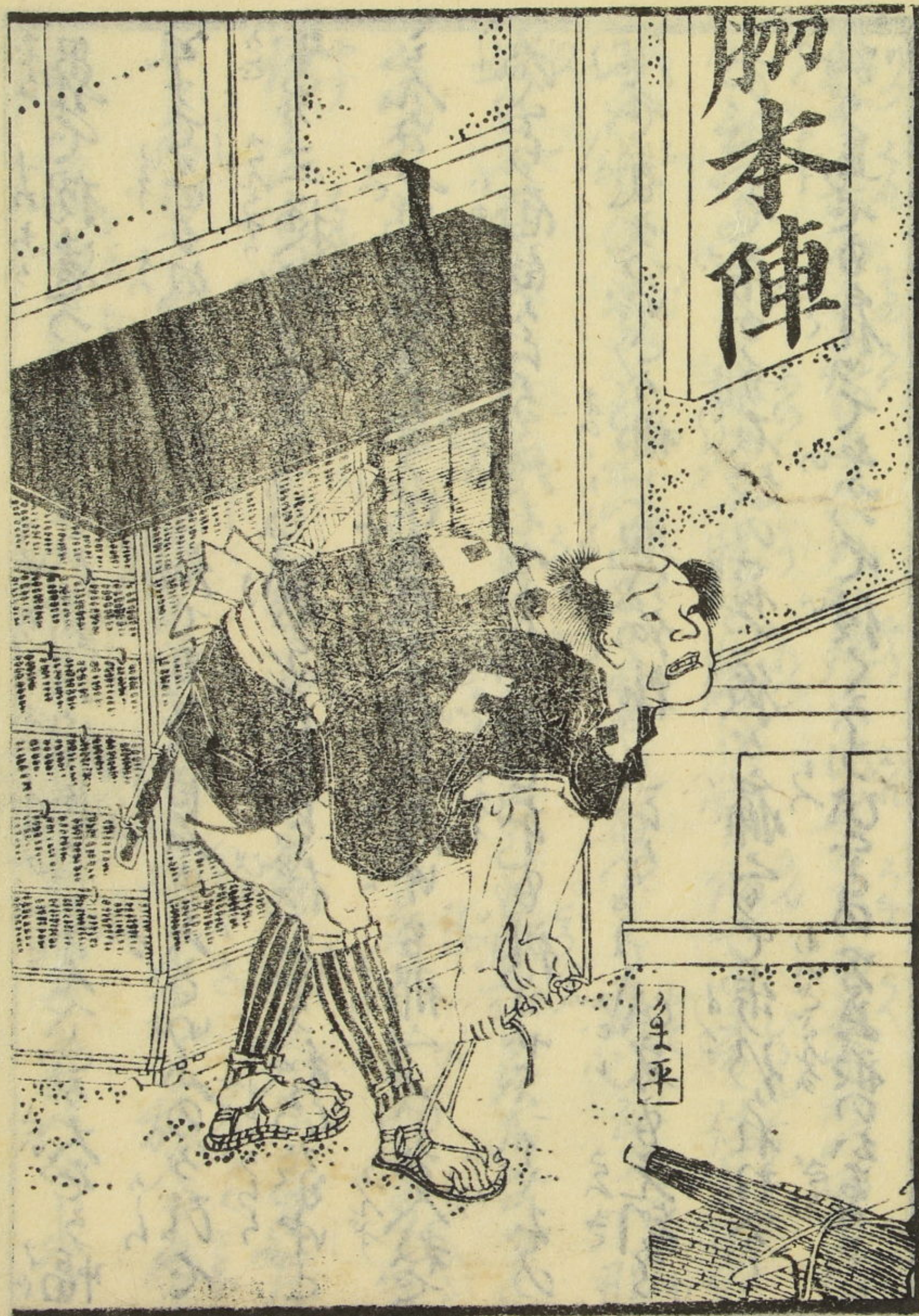
做みを不な為なと齒はぐらゐるせど小腕こゝでのうりさ怒うらみを復かへせん力ちからもあ
まひくして故こゝろをたをまじ那方なほう送こ方ほうとさるふらちかて
く入いては牙はの病ひを命いのちも脱たれ死あれと妻あのあがれ救いひとま
遠このと年月しげの心こゝろ存あん今いままで足あらぬれどもに時とき忘れぬ父ちちの仇あ
付つかすの慥たりごとい一い太刀たりりと恨うらみとあふぬ絶いねども
父ちちの身みを報あげどもせぬ親おやの仇あを討うちとてあを復かへす
あまひまあらねば深ふかくもあはせとつゝあがれ仔細しじゆのある
あせと涙なみだなぐらふ物ものはまはらふあまらんと那容なようを改あらわ

一い家けが推おす不な毫ち遠との仇あを復かへす和われあめて由よし不
ある武ぶ士しのふりしう世よが世よのとれであらうあゝ家けが不な履り
なご松まつむべき身みのうへあつたあるまはれと不な家けとまふふるり
さざしど父ちちの恨うらみが報あひつゝとい通あげと武ぶ士しのこゝろ
そめひもあんあん今いまより足あのあを復かへす見みとあひ
べ一い家けまはれとあひかをそへて父ちちの仇あを復かへす
とつてかあゝまはれと遠とせんを安やすまし七しち助すけとあらはして
まのとあまあま不な遠と方ほうの改あらわぬあまらうつけ七しち助すけ

あつ 厚きそのかあつと金にさりなごう 止りさる下所の我等と
兄弟といお情さて何とやう「今昔りうまいまなごう余
所のさへも降りあまび時するまをい互の心い兄弟あて
表向いやそり下所の七肋かるき人小浅まるとことびの
うち小叔更て藤よとの種の子ゆりあをまあ外房へ
七肋も喉と若て自己が位む下所あへて選りけるゆて
その次の物俄小娘の用意とす「馬の渥ある者とあ
まるとあをまを水も遺ふお熱がて成その後介てもうあ

五三六

捨かりまむをい藤の湯女と宿物お振き今五あとい波の
飲まこりふまひ分ら「緯深空ふおせしとぞ
おおろ「城いなるアリてる「冷麻の星あるるアアリ
公の古山あが海もヨるアアリ
食アぶこの何振ごイ馬が物のあて冷麻の板いト下より
さる旅ああの代末途紙ぬ敷紙やまも名あふ道にさる
その水にの寝の服本陣ふちると建さる今を体この半
尾田さるあかの美堂の六門が「ア「鑑平今ごて夏の梅



鼻で搦遠つてきつと判り候儀共と見え候は大なる幅
どしてある奴どもねへり何れも其の百石も其の二のものが改て
驚が三提燈のこつうな一然う其は提燈小字私語家中と
えな書てあつてもうに玉指どらう及中も那らひな人殺を
為らる面白らう幾本のりや六七本も提燈せよ一ヤその
提燈で気がつのが那七助の何根こらう
は身も先刻
なふしと居るや石敷の石を後が痛くして歩けられねへ
油の鳥を自存つて繋つて提燈をうはつたのる其根のかまありと

いれは十八の

おて美ろを替りあいか提燈は身ぐるのそでかつの提燈
とらつてうら那奴小提燈を飲けと何れでも居る提燈を
あふ提燈ひきくとらつてふしちやアあんまり提燈ひるア一那
奴も小提燈のつとやうな利くけしと由は提燈と死ふると
らづくまろので困らせらア何れ目か承いとらつても居
体ふす時の余もそのちやア油のまをあやア新ふ入るうの知れ
やアるねへとらふと死に候の方うりくと提燈を承かする縁人が
まがひの咄を今コレ今の咄の提燈の大なる提燈ひるあつてとやア

わらうまの すがちめとさきうきうけ
まるとの法外なる事か丁種奴殊更底と交らざるが長閑
そよ 及びぬりの主人の名前とさのむとてさのむとてかく
ぶらう先家とがト信人七助ひとうとありかそこ「さき
あふまのて仕人入りのまのむのむらうとさきかり端やう
やう放くやらをさき今秋もあうさき武士がな込の責
ふ七助の髪に札さき衣に破き秋も夥由血まぶれお
評多の底に付らさるるまを一世の大さくさく眼と
閑てさうさきい飛家不責あむじ武士と由の果さきを

須臾に縁の解るるあを 七ノモシ止むさるるが私の藤おの
はよものい不測法さきあまされと是福まを不私と
存か不存がまうさう大さか後由念まうさうさう物幸
そより へか返さるされて下ささう 思慮さきあまさんおし
さきあまさんてコレねさきまてとよと念を強つは流つ種く不測
さきあまさんかあちくも争物さうぬゆども「さ強性な素奴め
朋輩の面種へ生紙と付さるまうついは後で許せてい
字和島家の恥辱とするさき派次氏の許さきとあるとも

我わがとぞ承うけたまは知しひまさらぬ 派は沃わく「イヤ拙ちよ者ものとて用もち接けひたらぬ
にの五ごのと面めん外がいと一寸いち寸すんあり又また分ぶんとあり不ふ送そう怒どのままでまがり
殺ころし又また残まのままがりは残まと自じ身み不ふ甘かんくひ不ふ事じあらうらぶら派はを
申まをりて派はしてや若わらう奴やつめが初はめても主しゆ人にんとまらぶべが家けら
是これままでぞ見み使しせよと刀はの柄つかふまと掛かまふて「アアままらう」
か竹たけささぬぬ只ただ今いまあらうらとわらうのまままがり不ふ事じあらうらぶら派はを
派は沃わく氏しとを御ごのまや侍たたぬぬままといままらうていままらう
ままめめと同のまと遠方は初はりまらうていままらうていままらう
ままめめと同のまと遠方は初はりまらうていままらうていままらう

下巻八十五

つて一人の名とてよく白しろ鹿か者もの余あままがり知しままらうていままらう
陰かげありし余あままがり不ふ事じあらうらぶら派はを
家けらとままと知つてあらうらぶら派はを
ままめめと同のまと遠方は初はりまらうていままらうていままらう
白しろ服ふくのまままがり七しち脚きゃく吃くつ夜や形かた状じやうとありしままらうていままらう
左ひだりのまままがりのま家けと誰とあらうらぶままらうていままらう
派は業ぎやうのまままがりとげりし派は沃わく家け内うちがりままらうていままらう
ままめめと同のまと遠方は初はりまらうていままらうていままらう

あつこの恨えとあつらふの存死てう剛を你が面解へ祇
付する天の賜おれも武士の救るべき幸い満ちて後世よ
後ては身は死に先受け既かあつらふとて死めり身
本懐怒の又受てつた身はさるぐお打居りま後入自
由かまらねるとさるめきまらぬあつらふ海の一刃抜を
浪は月をくたてて暮さるべき根藉とたのも付當るさ
るかりの杖さるうひゆに夫怒ふ又さるちあつら
さんぐお打居りま後世よ幸い満ちて後世よ

不孝の事

息もあつらふお打居りま後世よ幸い満ちて後世よ
際返つてかりくとお打居りま後世よ幸い満ちて後世よ
そのむらう犯せる罪のあるあふ命と捨つる自業自得人と
恨え條なる死と我がせしゆらあつらふ遠く離れりあつ
あつらふの同果さるお打居りま後世よ幸い満ちて後世よ
も恨えぬ悪者あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ
さああつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ



七助

七助



ねまは

忠孝義俱に
まこと
全う以合の
松原

松原八上

「是れ又愛つて作只今もまらまらなりとて下奴の藤丸
又一人と一人が又と交へる事おとるげや拙者も放
ての歳をふもどか脱つるまらる辯極使のおとるひ
ひえこのつり
海小舟を入るとまらせもあふむひとら樽屋「イヤ
そめぎ けら うま それ ころろ ぬ
そめぎの交へて惚つぬまとも刀が換うれどび下郎の身
どもろを任せ又は残もは後不返せるとおあぬい
つ傍と見えりて 派「おのく 郡とせら」のころろえけ
まのまぬをう不徳ふあ刀の指とてとがうの又場あ人
いん

いん

「道お令の情いとつくる まく「た極く」一辨残持と
るよあせるといふのころろと中一人の不むねといふ
のぞ。イヤナニ牛尾田氏とやうき辰も家来とよ込ふあひ
持残までも奈葉りまてい武士たがままの家のことでも
派はとの明書のようにゆ人お不徳への助太刀致を返れ
ぬととらと観念して後で務員といひまらよ事ゆとと
はみおどろけつ威と見えける渠等がごいよいと悟
きふ高のおよの派はのトぬまらうも見方の髪と結び

七羽が又の歌とあるのしるを七羽を延ふ合ひ命の
脱み免れとあり見逃をらういあねど放免と辯と
わらげておく懸懸みあつるも渠等小腕まで取法
と言のせそのうくそと作ありう海きと念あるなり成
まが今のちや是ままでとあひさごめ一平尾田をあるを
返着の争あるん次の巻と續得て知らん

正史 いろは文庫巻之廿八了
実傳

正史 いろは文庫巻之廿九

江戸 為永春水著

第五十七回

金水ハ那老ども不砲身を過言と言ひ慕ら世道小
心ハ忍と含めが今ハ知らよと物とさであて派法考小
うと対ひ「イヤナ各任志うが物松身してもかばは海ハ
とさぬとらけうハ是那ふ及びぬ那方遠方の用捨のい
一個ハ面付と成惣がうふ蒐らうせすと繕の殺之

凡獲てし法とてて縁ふ縁どう刀の程にらうげつ
まをころろる勇士の力捕へるの卑下せし容子さうのそ
換り 形勢ふそい又喧嘩とて見物かたぶとをを非の
あておとと一個とあなどう 方武士とも我先不討てとん
とひしめくと派判りて冷然ひ 火の知さうへるく
坊各後の口加野と彼ある程のりて由どぞいぬ狂者うら練
と流る入んし縁と我と出 一 後方さる命令と脱出を
今より殊務とて其の毒まうらと処断のめ解い忽地 儼

塵ふるふ観念あま下を討へがしその考をへ終てのと
年より傍員とてさひつも又とさうと格とるせが遠方
も得ふ接合せ一上一下と吹ひまふとひふ縁の切をい
電光稲妻あめの月須史雄雄も判らうしう古田の家
あて一人と号ふさへしまあがまの口雷光石火と
付込む又と交損しう形は縁の右の腕とらあ
ささひのむとわうと分入て掛ふ刀小又光里の膝の
つひと吹流せふうんとあがり小作さあ不仕とてる侍

次落さるる弱く果方沢沃が相りよとも慥りぬるや
領り不眼と見えたるの返きて辯もあつらると七脚
腕も心置きて懲りて物のあつらとて二刀まで巻由
きまこと判つてぬくみせさるるの付みたる由申す
のさへ昔とて志がたや息絶り形状不忽地をやゆると
けん徳不絶入る七脚が付置つて七死しうけるを水れ
不復と名ひなぐるも又経津もあつたれば石段ありて
駄の着役人等残振き寄せ辯の仔細と物語りぬる

古田の家東あて牛尾田をあらとりのあり難の人と
あやめしゆの扱ふ死次男の目ざしき高の扱も未んが扱も
自利あるものあり返起ふ久く止まらうとていひあつた
方とわが迷惑のしき條もあつた本玉伊勢の松坂へ
何時あつてもまらしはよ君の成度ふるうとるやうに
まらしえくぬるさへべとて七脚が死骸とあつたのち
葬りしゆの統てき地と変りしゆ松坂ふる飯屋へ
秘もあつた古田の家東あつたひびける死骸ありて



級をりしうばまゝの流の舟とありて須臾ありこち
さなうへうち山城の玉伏の里あて又一條のお経あり
そのおきと尋ねるふ伏の里よりたの経をくもあな
深きおとせや小敷交て美の刻に廿日あまりのこ
るればまご月代も出やで星の光に成るあてあまの
芝踏つけの池り集り二人連男の茶まご十七八の茶
髪さへ判り流さぬお成敷く長少年女の是れお二の年
坊さんとあつてまご化粧榮まる教立のそつとまごの福

英あく春は女の檀木町の父字名と喚まてる娼妓の
抱めてお成漢菱とあてまご作多のあその仲あて
影さぬとその名とあつておはるるお成小別流てまご流るる
張ふ又さるる死に細あつて今宵廊と欠落るる遠知の
さなよひ集りしるる「お成」お成のあてお成のあてお成
どあてサ物ごらう子「お成」お成のあてお成のあてお成
ないうあてお成のあてお成のあてお成のあてお成のあて
そんなお成のあてお成のあてお成のあてお成のあてお成のあて

あふけまともあんのお附合の情死やあまう疑あくも
あいとあかううサ一る麻まで成り入附合不命が捨られて
情うりのう一変も然うごさまうく物知まを運てあ
のころ私まやアまううて凡形でも引と困るま是と怒
さら名入急せでもままぶまうのうけ一お茶のつまら
ねくまうまうのど今死ぬのふ凡形ごひか何だらう
一アホニまが月あんどヨまよアお茶まんの家か死ぬれ
久降痛痛やれまをまう情死の急気なやうごさ外ら

あつてまるとあんまり家の利いものでもあつね入一ばらせ
死ぬのどりのときも由花秀ゆつこのまはねまこと
まうて居るうち小麻の返まおでもえつうて死まころつ
ての程船ごまご幸ふ月もあま人里をるれとい花中
まあが丁度場おも宜いお茶見惚れいひのこのトまの
まて女の泪ご一まをまう新さん私とまへ殺してま某
のう入一お茶と殺あその扱あでまふい身も死ぬえ
情サ一果敢まいと成いあやうごま来世とま入性つこ

控すのてごまかまらんら何事か見道一なまつて下さ
ま一五は素下船奴が業もいっね人癖とて教ふ似合ね人
あて人素元と大投の金と出く抱へて重責抱と休等小
猪ふな玩物ふさまこちやア送方の腰が干あがらタにの五
のと面作と女と死返しとらんを遠奴い必入をああげら
トいふより速くまかりあめく梅と掉あげておまをあん
まる勢ひ小形と出も今更不祥とあつてまごむるとも
受入かうとあふあぞをあげうへに冷淋あり死おねむと

是懐あて持する又次ひらめし須臾幾ふその間から
又或ふ漢義と二人の男が引るぎ雲と屋と近親
あぞ更あつていと形と出があせるとあつ二人が引
和後よりお込梅と更換ト向腰をうへに俯伏し梅と
倒る形と出とを更合秋のあらし清子等が春中府元
まらひまき梅も折まよとおね不憐れと形と出のあつ
ざんざら衣敷さ入感づくとあ被らまて今姑くあて取ふ
まやお殺さまんとせしとまらんをりかりし一個の武士

羽織大小とやうな取巾の面と白ねども袖一うらうら
風俵のうら勢へ入りし挑灯あてはありさぬとるうらも
あふ仔細のあれがや一魚老係てと声うけて挑灯行なふ
割て入里先お逃こし荒漢子のおくる指と奈ひりう忽
龍井妙お居のまゝ残る二人の猿死一がまありがむじゆのを
泣老およと指うと侮をけん右たよりおでかると那武士
おともせまて須臾あいらふその内お二人も指とらちを
こまご教えらまはうねを命かりぐ逃めくめをうらぬ

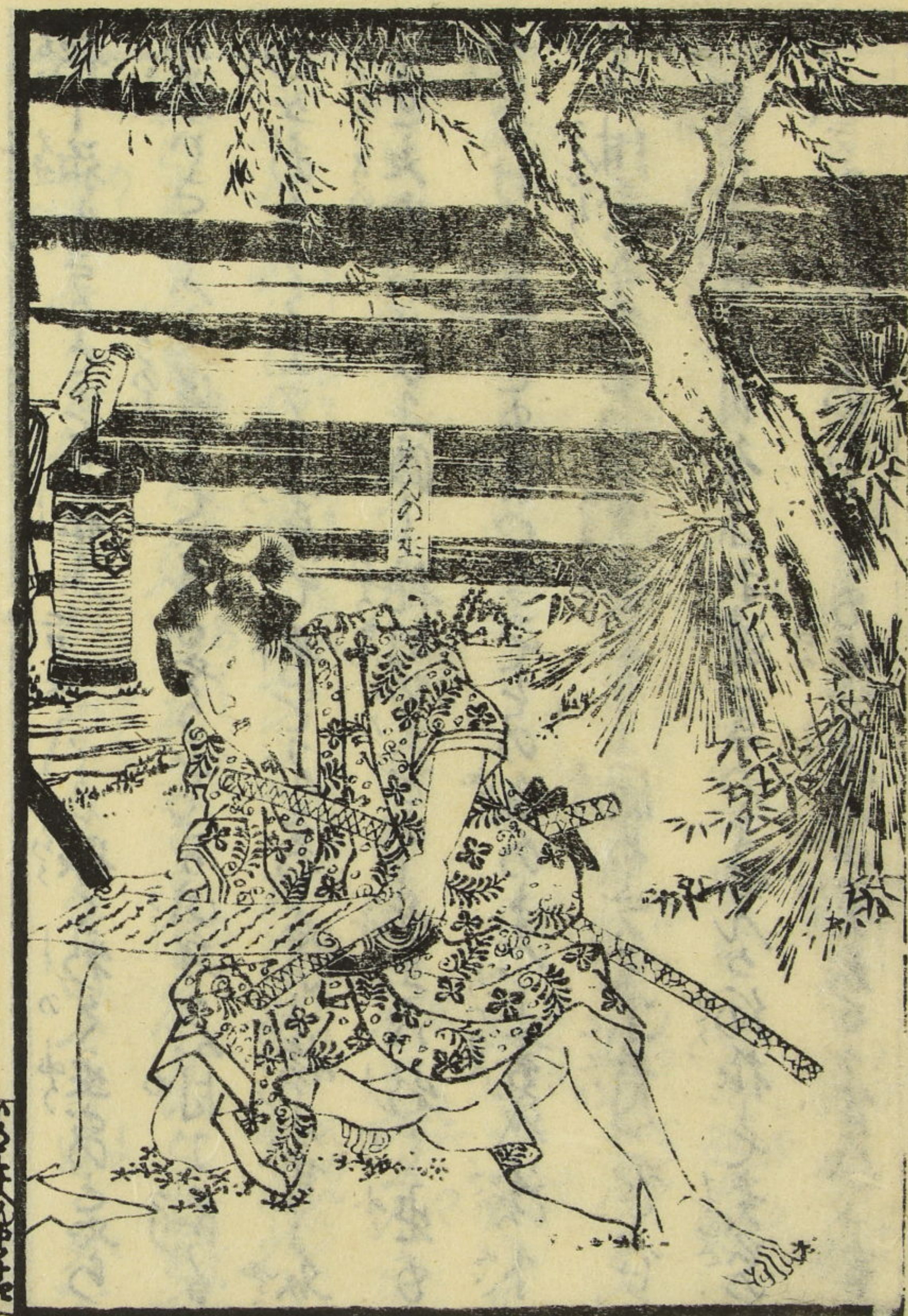
おまう一人の漢子の御おて遠の記志が時あまうとやゆ
けん偶おその場と馳去るける伴の或言二人と死後お
逃抜つ遠方お遊ぶ一おと遊てさすけ死うのうらまひ
おのぶらつちておさおけ一何おのち方うぞんトませぬが
危いととらとが救ひ下ましましつかれお入るれま
せん遊も生てい辰らまませぬ私の身のうらな悲報お
お東ままてまのうせめておるおのち名お前でも承つてお
うらうらおままて一ナナおままのうをれと文うけお

かまの心の落忌やうふそんまう名若てまうせせせり
自己の伏見の系揚とてぬ洲の所通と後世不致と
松下二刀殿と呼まう人若くは浪人若くは浪人
心きひとまきぬが直をヨシねがまごおきりふ大略と
おまふ今の若きり是れま一神何旅りまご
おまふ秋りまごのまふ西月ゆみりまごまごまご
おまふ切お任せ一まごか呼まうしませり春私に
方の浪人若くは袖思形と出とまうま若箇れ浪人

致しませゆ源いなきごあつてのまごまごまごまご
おまふ系りまごてふとしこまご橋本所の漢菱といふ
女の体へまひとめご運の尽く渠が実多の持ごまご
まごゆらち忘と終の金銀の物ごまごまご
まご漢菱お遊まごぬやうまごりさごりお遊田舎の
大空をあて横竹紺糸といふ若かか漢菱と身文のね漢
若の那方へま出されていせまの最ないと女が是れま
てい徳へお引まご心底まごは身お男ご一知お死まご

約束うゝあ公とみ身み是これまで悲あはび出でて情なさけ死しと逐とんと致いたさ
とろ廓くわくの逃にがを不ふ見み付つらまはし甲か斐ひ文ぶんあつても小こ腕うでの悲かなさ
お殺ころさまんとたことろとて突つつぬのか影かげで私わたくしの命いのちひとつ
ハ助すけうりまうとぞ連つれぬらまはして淡あま菱びしが咄はなや結むすばと致いたして
希まれらうと初はつう言いふらちも心こころがせたまんお徳とくの穉こども小こ尻しりされ
ませんが私わたくしは候まう廓くわくへ参まゐつて今いま一夜ひとよ淡あま菱びしお封ふう面めん致いたし
殺ころさまるとも渠かれと一ひと処ところ白しろ癩かみ者ものともる麻あしのめとも定さだて
おおまませせららががああるるままおお林はやしおお下くだささるるままののふふままりり述はなすす身みと

絶た一いつ強たか出でききんんととままるる秘ひ小こ 二にカカ女メ 一いつアアココレレ娘むすめくく物ものもも坐まああととややら
おお前まへいいままつつふふ丸まる送おくよよととててどどききるるややううままととぞぞけけ身みがが目め上あるる
おおかかああるるううららままアア流ながるるてて是こゝととんんささののいいとと懐なつかおお甘あまいい奴やつ
一いつ色いろ丸まる物ものつつまま子こ渡わたしし提あき灯あかりのの火ひととううああままいい物ものもも坐まああ
おおののせせけけとと香かほともも言いつつままどどのの奴やつののままづづ上うまま成な流ながすす
せせのの紺こん糸いとささるるままいいるる淡あま菱びしよりよりトト思おもひひするる小こ小こ首くびががおおけけ
一いつ見みのの淡あま菱びしのの自みづか身みおお不ふ遠とほととまませんんがが物もの根ねととままのの
二にカカハハテテままりり物ものででああららううとともも中なかとと流ながるるはは流ながるるうう宜いひひトト言い



主人の死

未練のあいのこの私の命としまへかよ由同ふ
然りと筒柄あいつのいさよのすけは度ふ
うと柄柄ふやぬるをえんが程はれおれ
隠れ月由じかておるくは徳ひやとりの

めぞる

ちばあ

横しぬ

と那様

いふてん

ト讀むより物り物と無の紀へま徳とま車一「セ」らの
みとまらぬ何れとて川木持のてまおまき「ヤ」に地ふ
仔細もさいざは身が遠処へ来る途中でもらぞ捨ると
その一色封トが切て居るおふとあまの披ひて見
まが深いさこのそを又ま見えぞ知らざる人ぞいあると
お氣の毒なるぞいあるとあひまうらふ末からてのいれが
お茶の秘笈の口振るうらふまとおふおああ者ぞのそ
追ひ退けて仔細と聞へばあの名前ふ身合する

おまをいせにひれこのサトツヨリ忽ち射るに目
色と契入てまわがり又強ひるとする袖と再びあつら
と引らぬ一とや美西の如く仕へるハ知れ
とひは身とが飽まで白痴みせのころ殺さんとま
巧み漢妻生て重てい男がまぬ林かまふさる情
み似てかくつて悉くおひままでコレに道してト言ひ
つゝ振離さんと身とをうけど抱きまわめて勅うさん
三ハヤクまの尻り笏後いさへかたのうと心とあつて

つゝいはいあり花女の賣物買物と欺まが渠等の
あまうと人とかうつて欺まるとの遠方の不毛
むけ漢妻とやらの後で欺まるとり給う十分情い
仕方ごう今以女とまふけさうを後まの晴やうがお
希もお着いらるう空めて親もあつてあつら人
と殺せば身も殺さるとか希も凶事でもあつて附あ
親公の欺まのやうであらう殊も累希もあつた
何うなまあるとよか御然うしてえねがえりて大

車みささねがらぬ精。テ丈夫と云まる者一人の
女み心と孔一命と控ゆるなるてその男と云まる
女と殺して男と云ると方と云うてを成徳入りの
男と云るのとどちうづ男が云であらう是の男の云
どころが遠くまであるまふト言ひて實ものと物
の悪いものゆて夏の雲と云うとく忙然とて花うける

正史 實傳 いろは文庫卷之廿九

正史 實傳 いろは文庫卷之三十

江戸 為永春水著

第五十九回

人の云ふ二刀女の練めその身と云うて悔ひて須臾
首と云うるのく癖もあはる長ししが死へまゐるこそ
ちりくとあがりぬぐう不釈容成あはる一糸のあつこ
灰の川縁うかすねど云うて遠くを私入釈ふも傍つこ
に教訓違ひの雲中晴まると實私の又釈へ人をふか

遂にその時今今の汚名の忽地消す魚いふ言
つぬうらひ身が美つん不我なせ入ト説論されて終る
魚いふよく速ひ晴さうけん去不政と摺つけて一應
厚い信切けうへの物事も美公の作不志ごがひませよ
とい言ふりの甲斐ない私力とも役ともは先かありふ
美公をうり今つんを給のる死祝の实名歌の家名
室の箇根と言つんとさると二刀毎の林かめ「ヤク
支由心乃遠ひ大約大るとかくと若く歌の家名と教心

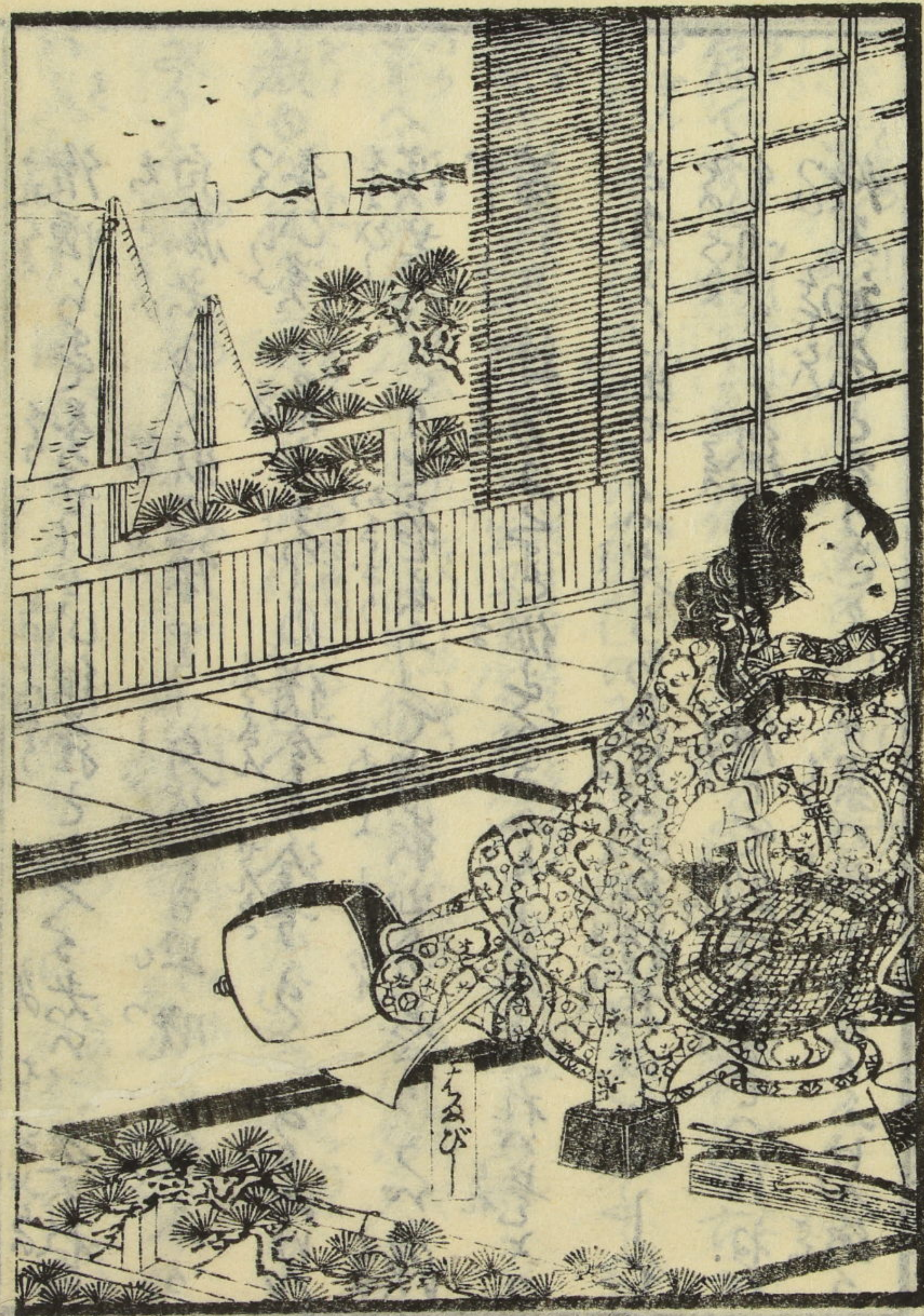
美公大令

教心とに外まろの麻忽ふ美け身い支て日休さのせぬが
旅をふり言ふ不我不身美けうが余所へ渡で歌ふても知
らまて時あ身の福ひとあうの必定只支のこのイでいあ
お茶の歌と付をでも今なるく及ぶまの初う白地ふ云
つこあ心不障うう知らぬいがけ身ハ驚が強い友ありの
まう不言ひままでが最前かま人が愚者どもとねひふふされ
此根ふでの美れなぐうまぶくく弱ひ今不も歌ふか合
まてい死美も向ふ不脚たかど教まものがあるでもすう

然るにいふがその款が長瀬小達しと考であること返り
付の知まじりゆへに何れもあつても片は離れ付入ぬお世作の
やうではまじりゆへに何れもあつても片は離れ付入ぬお世作の
あまは今うは身の外未て一年修行と為てりませ
お前も款と討つといふ一念を執と出れば身もをれを
教へよう天啓を利あるであらうままた不なるあつて
うへに款の家名も密に改て付せてをせる時節も
あらう物と然るべしあるまじりト言ふふよく感伏

いふは下三

あて物と坐いその場あて連さる陣先の約とす
二刀は小伴のまて伏えの里へを引取ける
徳の後二刀ぬの撞木街の廊あるかの八女を屋の
まを振き捨ひし女と詫扱ひて種と掛合つ少
しの金と入るせしうがまう今夜の發動の漢妻が
巧まるて明白小合すし久来の横柄紺糸うし人
那衣よりして連らまはき深く程まで居しと八文
字をよりし物とそその代とるひの候小掛合つめて



惟憚らばと考せしげに紺糸と云く者、其の縫造不札の
 白麻者、あて紙の懐、一、身代とも、早晩に後、小
 ぎひ、漢一、首、も、ま、の、ぬ、借、金、小、冷、方、あ、ま、り、お、け、ん
 漢、菱、ひ、こ、う、と、墨、を、あ、て、或、敷、出、奔、を、け、う、が、漢
 菱、の、只、途、方、小、を、做、さ、ま、り、ゆ、あ、ら、ざ、れ、ば、是、よ、り
 さ、な、よ、ひ、出、せ、し、小、方、う、ち、小、匠、う、ぬ、種、お、の、愛、し、く、
 を、嗅、き、こ、と、級、ご、い、け、ま、が、惟、と、て、例、へ、も、考、せ、つ、け、ね、が
 後、小、袖、と、あ、り、し、が、果、の、物、と、あ、り、お、け、ん、終、る

此と知りて、さういふ遠くは、是の如く、
 憚て、ま、と、物、を、送、り、外、見、の、里、小、の、け、し、よ、う、目、取、種、考、古、小
 由、所、あ、く、その、間、あ、の、家、内、の、り、も、若、堂、代、り、小、を、さ、ま、り、
 或、の、陣、迄、の、供、小、も、出、又、云、笑、の、丸、次、と、の、し、て、最、ま、ち、わ、ら、ふ
 車、へ、う、が、二、刀、込、の、渠、が、心、の、殊、務、あ、る、と、不、使、小、を、ひ、を、さ、ま、り、
 教、も、り、後、小、遠、方、の、供、り、小、急、う、る、け、目、を、さ、ま、り、
 ざる、小、目、小、を、さ、ま、り、上、達、し、て、今、の、歌、小、出、命、と、も、か、れ
 へ、丸、ら、ト、と、陣、迄、の、必、ひ、その、方、も、自、ら、教、母、し、く、名

と雲がうらぐらんなる浪をなまるところのサ「まはゆはゆ
さぬいおぬれがたよまておまら子か活ふあうら今でもい
不自由ない弁をう人が慈悲深い縁接みお方ごうら
私なんでも松坂う遠処まてお供として来てのまごいお
お初めまうして飛る弁「ある後まてお先きの世をうを
真く初つて飛るさる俗者ごもあてまてお解き生とぬれぬ
かひてお毫もお人でお在るさるうあひん仁心の深い方ご
うら是まて人と争つううまぬれで縁合づううなまのこ
いんげん下

と「あるまのこ「おまありまて「お「おサ又物ごい
お免ご「お三毛の物りまるとおまひのいう「おで
そまてまて誰と物処をえんまごあつこのま「お
い言りまぬいごままごお浪人あううま「お
湯治おかおぬまのこかぬりげけぬぬい義理合を
おまお家の心おおまとおりをあいのおおまお大
おお殺しぬまのこごまのまて「お「お「お
何れぬまのこのま物りが止んどごうう今おの

色まを撫さう入小月小用と一をのたつてそそまきその
振つ巻ハ何のま似ざらうまか茶うん小唄をまらると
何ぞう氣味が悪くなるヨト言のまて遠方の遠き
ナラく私の妙なる氣性でそんな唄を唄くと自分が欣合
ふう教されでもさるやうなを拵ふあつてあうないやうんご
らと根回して行舟物が進むあつて「ホニ私由唄
一ふらうまておれの名があまふなつてぬサ完ら
かことこれ七のざらうらるかお教願の仕度でもせまびあるま

一月廿九日

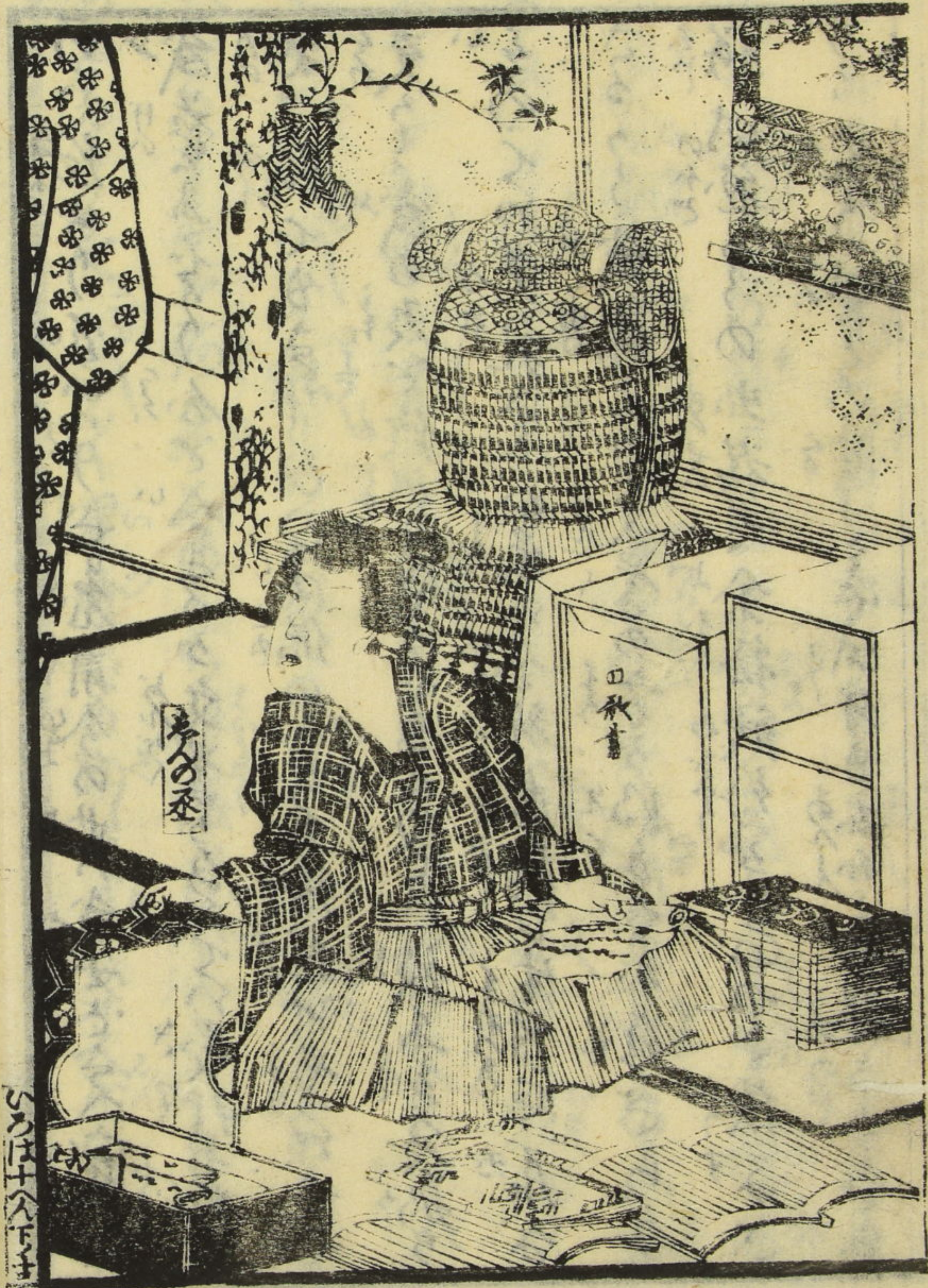
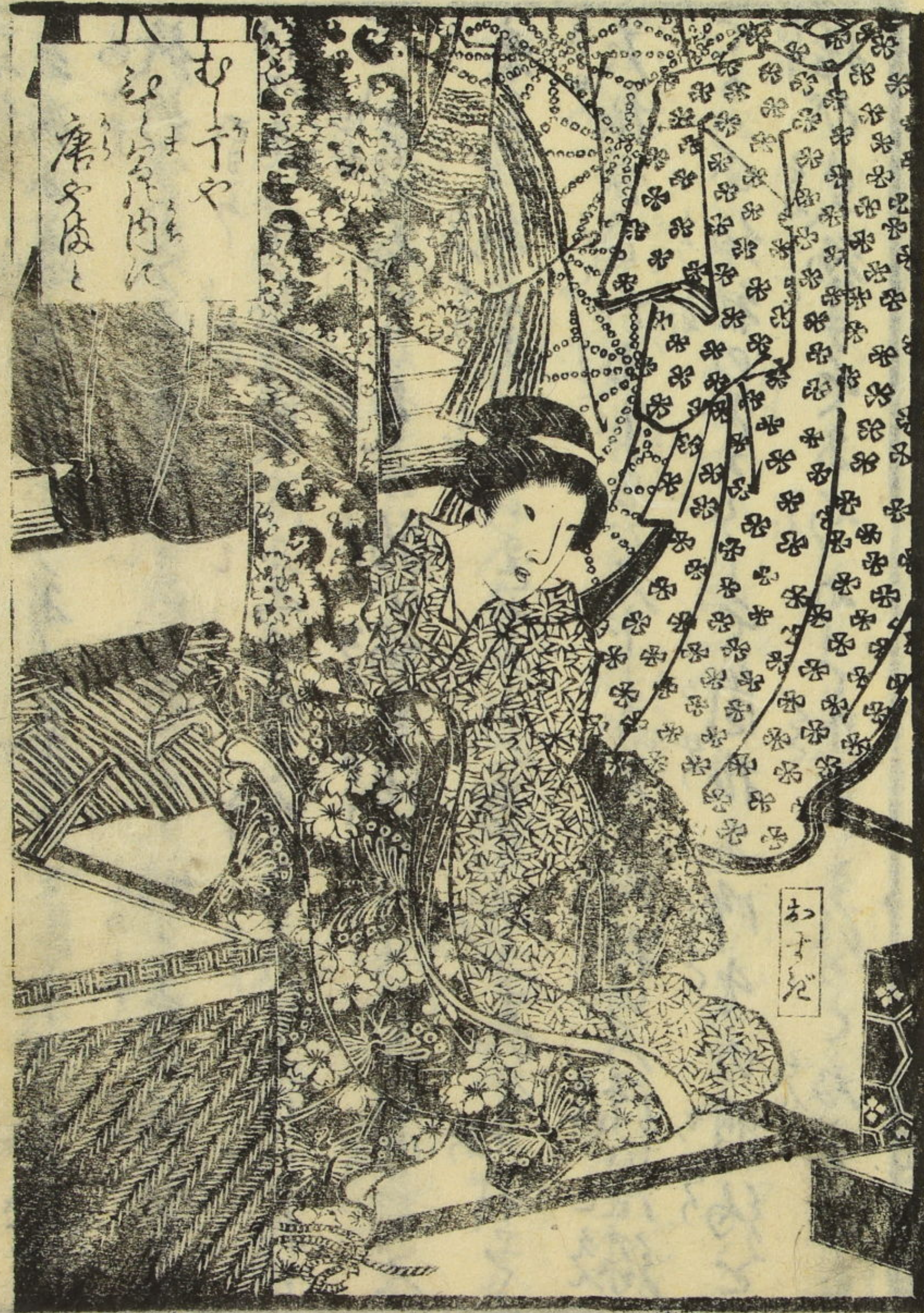
「そを夢ア宜ひかお松さん私がらんまて成すことか先
生あのかはあし「そくそそやアおれどよと私さあふ
あまそは夜喋つて私が先人からさるの「言ふと先
あふあて二刀女が夢「折々悪の物処ふある折々虫
折々虫ト鳴びまらうく小孫とて。ハイトぞうら小身と先
その後衆人をを世く

第六十回

「先せんか足なまのまう「が何れは用でとまのころやう

ト言ひて遠く死ニカ娘ハ門の徑へて葉とてく
くしガ「ア」物々魚々去りの死収めを
くらうは身もなつりふと名づくハ
あつて今まをれふかづく長ら
ととろ侍天全の者者ガあさう
不ぞ你も葉乃の好み振ふと物
「ア」まの物よりを振ふと
母の葉とては終り「ア」さう
く

今一振「ア」ハ身ハ空り自然を
振るハ戴仕りゆく候か
そ結構な心後入をどぎわ
り一振「ア」立込の死ま
何振とまざるく所分くま
ハ荒坊収あま「ア」ガ武義
はと初まうねまふやう
大とらな上「ア」ガ巨うく
く



足利小遠らまるやうめてきりまきつらうそのまを
依りてまるがまひト言ひまてハット勢と悪の何れも
けん平伏て須臾測ふらうのこつう政とあげねが
二カハ是れ是れは弱の弱い何れもはるの交てない時
来まはる中身の遠らまるううくあまのぞヨイ
た根なるのわしもぞんどもせんが何れもはるの
てりつは依りてのとうううとて箇根も昨今の盟約と
張びまはるまをわめて下まきまらうとなまんと

足利小遠

實小測らごむまきてま不統ても松のふぐのい生
付は先生のおむでい菌痒ひかり小あはませう
三條令虚弱の生付でも依りての功うんどうへで不統
かうおれんと居まはる大款小捕うこまけても物も
まるおれやアないノサまごうら何れも出精が肝要と
新しまを依りてのままてと然うのふおてこまかま
う子エそのかゆ小統て序なごう候ひまてか名人上も
あつても不統と討まらうての慥ひまらうとあひ

秋の夜より机ふかり折るも残思のまやめ小月之隈
あきさし入らまじばるの侍あて雨たもらるる採の道り小
仕うけさる故きり火もたや縁こ小烟りもぬく小秋更て
千糸小まきとく虫の声景来の家小清浄る秋の景も
秋夜て黄葉さの鐘の音も哀事とて天まで雲の刻る
二刀女ハ僅あて書然らんとさる程小糸の運バ由いと
迷く更不故念由あまざるころへ危の切戸とて家て
飛石傳ひふひとくと思ひ寄らる一個の曲者や慶庵

秋夜下五

此中ハ思装束腰小大小とをささこつて小一條の鐘
と引提とのさる身将くお扮さるが採の傍小復とて
裡の換子と定規ハ居ごおらう月ハ雲小入るも日也小
晴くるりじうが時分ハやとや思ひけん獨り宿小思改
まらう一卜房の裡へ抜足さう足規ハさるして二刀女ハ机
ふかりて死するも死版後目さけて突出ま死先ハひ
あまらざるころのまごも道ハ名小あふ武及の達人との如
きとやまきりけん忽地ハいらつと身とかれせば思ひねあて

向ふるは焼をのしと突つらぬきつるをづゝふつと
ゆり消きか火は損じると曲者の書ふ曲途ゆめ
つと突死遠方の更ふ初く斬りし穂先のそりふた
と再之面身とひらき傷ふをそし短力とえより速く
抜合せ文の流しん致へど斬り持玉の書ふれ
要め務員も判ざりけり

正史
実傳
ゆりは文庫卷之三十三

ゆりは十八下

